

季候の變遷：雜録

著者	住田，義夫
雑誌名	龍南會雜誌
巻	9 6
ページ	5 8 - 6 2
発行年	1902-12-21
その他の言語のタイトル	季候の変遷：雜録
URL	http://hdl.handle.net/2298/5429

の空論たるを免れぬ事がある。吾人は博士の所謂新宗教の如き者を直ちに今日に於て新設しやうとの説には多少疑義を有して居る者である。が、兎に角博士の雄大なる倫理的文明的宗教論が海老名氏等の崇高なる人格熱烈なる情感の感化と共に博士の所謂「社會的良心」を現代社會の内に生みつゝある事は正に全世界が双手を舉げて歡呼すべき宗教界の一大吉兆である。蓋し此大勢が我國をして二十世紀に於て一大宗教思想と一大宗教的人格を世界に貢獻するを得せしむ事は瞭々火を睹るよりも明である。

(「一」完)

季候の變遷

住 田 義 夫

天地ありてより上下數千歳、天は長へに高く、地は萬古に厚々、春あり秋あり。新緑朝に成れば、紅葉暮に剝落す、人は形骸をこの宇内に寓し、且に叫び夕に哭し、役々として其生を營むも、やがて碑石苔冷かなる處に葬らるれば、泡沫一消、空しく永遠の懷に眠りてまた還らず。人生五十、素より長しとなさず。されど萬衆一口、皆其須臾なるを嘆ずるもの亦故なしとせんや。是れ蓋し、時々刻々、絶へず移動する人生の盛衰興亡、及び自然界の變遷推移が、人生をしてしかく短縮ならしむるによるなり。是を吾人の遊旅につきて考ふるも、かの變化なき單調なる道を旅行する時は、其長さに倦むも、風光の局面變化極りなき旅程にありては、更に其長きを感じる事なし。是と等しく、複雑なる人事の推移と、自然の變化とは、實にこの人生の長程をして、短且つ興味あらしむるに於て絶大なる勢力を有するものなり。而して其自然界の變化の最も偉大にして、最も興味あるものは、

實に氣候の變遷にあり。故に冷酷なる科學的見地以外に於て、溫かき同情をよせて、此季候の變遷が、如何ばかり豊かなる感興と趣味とを人生に附與するものなるかを觀察するは、正に吾人の務む可き所にあらずや。吾人は、彼の科學を無視し、放論高語、徒に宇宙の眞機に眩耀し、其神秘なる靈動に謳歌し、其間に如何なる科學的眞理が伏在せるやを、組織的に研究せん事を怠る者にあらず。又彼の趣味の何物たるを解せざる、一派の科學者が説けるが如く、地球の回轉あらばこゝに春夏秋冬の四季を生ずるは、正に是れ理の然る可き所なりと、極めて乾燥無味なる論斷を下して止まむとする者にもあらず。是等四季の變遷の如き、素より尋常一般の事に屬し、敢て事新しく述ぶるの要なきに似たりと雖も、宇宙の靈機は、實にかゝる間に於て最も遺憾なく發揮せられつつあり。潛心沈思、天の人生に對して、この適時の季候を與ふる所以のものを尋求するに、亦頗る大なる意味あるを覺ゆ。人は四圍の季候の變遷によりて、恒に自ら樂しみ、自ら新なるを得るなり。ビクトル・ザン氏曰く、『宇宙の長へに新なる美を樂しましめんが爲めに、天が之を吾人に與へたるなり』と。實に季候の變轉は造物主の大經なり。天豈に無意の虚を爲すものならんや。

小にしては、一日には朝夕の季候あり。鷄鳴曉を報するや。旭陽は正に紅の光を漲らして地平線上に顯はれんとし、麗しき耀を以て山嶺の一角を照し、野を染め森を彩どり、東天皆笑ふに至れば、曉光天地に滿ち、山河草木皆清韻を帶び、我亦自ら新なるを覺ゆ。白露草を濕し、纖埃起らず、清淑なる空氣は滿身に徹す。葉陰を渡る風の音、梢に囀る百鳥の聲、見渡す限りの天然、何れか希望と快活とを以て滿されざる。吾人はこの間に、宇宙の最も莊嚴にして雄偉なる、ある物を感ずるにあらずや。而して是が爲に、吾人の身軀、一段の活力を加へ、精氣更に新なるを得るにあらずや。

日没して暮色遠きより來れば、茫蒼たる空には、星辰、爛熳として花の如く宿を列らね、閃々たる光を無限の寥天に放つ。吾人はこの間に、宇宙の最も幽遠にして玄妙なる、ある物を感ずるにあらずや。而して是が爲に、吾人は人事一切の纏々より脱出して、宇宙靈淑の氣を吸收し、永遠の眞中に運び去らるゝにあらずや。

僅かに一日朝夕の變轉にありても、尙ほ且つ吾人の心身を清新ならしむる事斯くの如し。若し夫れ一年の最始に當り、東園の梅花すでに春を報じ、陽氣こゝに動て生氣活動の徵あり。春風暢和、黃鳥歌ひ、雲雀囀り、山は淡霞を帯びて青く、水は落葩を浮べて清く、綠麥黃菜、相交錯するに至ては、田夫野人と雖も、焉ぞ歡喜と感謝との念に溢れて、天の惠を仰がざらんや。既にして紅落ち黄散じて、新緑の色鮮やかに、微風徐ろに吹き渡りて、湖水さゞなみを起すに至れば、久しく濃艶なる春光に親灸せし吾人は、この初夏の光景に對して、始めて其心目を清新ならしむ。火雲西の空に湧くや、或は北窓によりて涼をとり、或は翠色滴る處、靜かに樹蔭に讀書す。その快味たるや、赫々たる炎威ありて後始めて得らるゝにあらずや。已にして秋冷微かに動き、天色水の如く、銀月霜を帯びて白く、更たけて遠寺の鐘聲かすかにひびき、數行の過雁、月影を掠むるに至れば、萬里遠征の客たらずとも、亦豈に一片感慨の胸裏に往來するならんや。況んや叢にすだく蟲聲、露を宿せる秋草、孰れか酷吏去て故人來るの感なからざらん。寒露白霜滿地に滋く、葉は落ち草は枯れ、蕭條たる晩秋、千山の紅葉一時に燃ゆるに至つては、滿目の光景、更に情懷に切なるものあり。飛雪紛々、天に滿ち、地を埋むる時、玲瓏たる清景、眞に天賜の美なり。嗚呼此等の變化錯綜限りなき景情と趣味とは、皆四時季候の推移より生ずるものにあらずや。

而も季候の生命とする所は實に其節序に従へる變化にあり。人は、其變化の實質の如何なるよりも、寧ろ變化其れ自身を好むの性を有し、相應に快樂を見出す可き現狀をも、尙ほ且つ積極的快樂に乏しき變化に向ては、之を犠牲に供せんとするの傾あり。春光如何に賞す可しと雖も、北米サンフランシスコ附近の如く、終年氣候の變化なく、常に氣暖かにして、花笑ひ鳥歌ふが如き地にありては、久しからずして自ら倦厭の情を生ぜざるなき能はず。瑞西の夏また可なり。清冷なる山境、清淨たる湖を亘る涼風に浴し、或は仰てアルプス連嶺千秋の雪を望む。其快や實に云ふ可からざるものあらん、然れども之を長うすれば、自ら懶殺せらるゝの恐あり。又秋風乾坤に吹き渡る時や、山野の間に放浪して、以て身体の健康を養ふ可く、或は讀書によろしく、默想によろしく、實に吾人心身修養の好時たり。然も之を久しうすれば、蕭條寂殺の氣、自ら肌を侵すを覺ゆるに至らん、朝毎に置く霜漸く深く、季はすでに冬に入りて、寒威凜烈、白雪滿地に降りしくに至れば、人は忌はしき雪と叫び、速に冬の去らん事を願ふ。然も一年の節序より冬を取り去らば、世界は如何に無趣味なる可さか。如何に物足らぬ心地す可さか。雷に銀世界の壯觀を空しくするのみにあらざる可し。

彼の西比利亞の大陸にありては、滿目の郊野、空漠蕭條として、到る處眺望單調にして、眞に人をして其大陸的風光の無趣味なるに驚殺せしむ。朔風原頭を拂ひ、森林皆落葉し、鳥は南方に去り、他の動物は悉く影を土中に潜むるや、飛雪紛々、一朝にして千里の野を埋め去り、極目の風光、何等の變化もなく、何等の趣味もなく、全土を舉げて氷雪の下に没し、陰鬱暗憺たる長き冬と長き夜とは、荒涼たる天地を鎖して半年の長さに至る、而もこの單調に、多大の變化を與ふるものは、實に季節の變轉にあらずや。見よ四五月の交に至り、郊野の表面を蔽へる氷雪、一時に融解し始め、

下萌出づる春草は、和煦たる春風に浴して驚く可き發育を遂げ、見る／＼寸に達し、尺に至り、丈に及び、未だ一ヶ月を経ざるに、早くも荅をつけ、花を開き、紅黃白紫、繚亂として芳香を放つ。此間また、鶴雁の類、南方より歸り來りて水邊に悠遊せるを見る可く、數萬の水禽は、形美しき馴鹿と相伍して、野苧を食ひ、紅覆盆子を啄む。時ありて烏鵲の晶瑩たる空中を飛翔するもの、恰も彗星の光芒とも見る可き一條の白氣を引き、快活なる告天子は、長閑なる春日に和唱して、ことに無人の一大樂園を形造る。生涯の殆んど總てを、氷雪の裡に送過する、憐むべき北陲の土人、また天の恩恵に洩れず。彼等はこの麗しき樂園にささよひ、慈愛なる自然の懷に眠る。吾人はここに至て、益造物主の用意の周到なるに驚嘆せずんばあらず。

季候は聲なくして來り、音なくしてゆく。而も尙ほ天地萬有を變じ、宇宙乾坤の象を革む。其變化や急劇ならずと雖も、冥々の中、無限の勢力を有し遅々の中、不測の大作用を遂ぐ。四時季候の變轉により時に雨あり風あり。時に寒あり暑あり。時に花あり月あり。亦雪あり。以て人をして送迎應接に遑あらずらしむ。吾人は之によりて無限の趣味と無限の感興とを享受し、其生の移るを知らず。天は斯くの如き靈味の季候を人生に配し、吾人をして其趣味感興を樂しましむるに吝ならず。吾人豈其天意を空しく看過して可ならんや。(十二月月上旬稿)

